

151	五二半捕物帖(1)	賭場でいつも半座にすわり、五と二の半目を押し通すところから“五二半の旦那”と呼ばれる小粋でやくざな貧乏侍、それが無役の御家人甲斐半次郎。その実、南町奉行所直属の御府内隠密廻り同心であった。傑作捕物控全八話。		春陽文庫
152	続五二半捕物帖(2)	時には浪人姿となって裏長屋に暮らし、時には商家の遊び好きな旦那に化けて賭場に出入りし、遊里に遊ぶ。また時には行商人となって御府内を走る。隠密同心は身分を知られてはならない。好評「五二半捕物帖」代二集。		春陽文庫
153	新五二半捕物帖(3)	日本橋の本材木町三丁目と四丁目の間の河岸にある大番屋は、俗に「三四の番屋」と呼ばれている。その三四の番屋から本郷は湯島天神境内の矢場女お袖が五日ぶりに放免されたのは、春の昼下がり、河岸の柳から雫が光りながらこぼれている雨上がりのことだった。お袖は過去に三度の妾奉公をしていたが、いずれも短い間に死別し、“死神を連れた女”といった暗い影を漂わせていた。そんなお袖を海賊橋のたもとですれ違った道楽者らしい三十男が、昼間からの酒機嫌らしいとろんとした目つきで眺めていた。(第一話・泥の		春陽文庫

154	五二半捕物帖(4)	<p>まだ明けきらぬ白い道を、守宮の弥八は背を丸めて歩いていた。三十歳の働き盛りには見えない後姿であった。弥八は元からくり人形の細工師で、手先の器用が徒で盗みの道へ。役一カ月前にどじを踏んで捕まり、十両盗めば首が飛ぶといわれる土蔵破りの総額が千二百余両とて、市中引廻しのうえ獄門を申し渡されたが、“赤猫”で牢払いになったのだった。引き返せば罪一等は減じられる。が、ご赦免になるわけではなく、いずれ三宅か八丈か……。</p> <p>と、そんな弥八の心の迷いに、そっと声をかけてきた男があった。(第八話・泥棒市) 五と二の半目を押し通して“五二半の旦那”と呼ばれる甲斐半次郎の捕</p>		春陽文庫
155	五二半捕物帖(5)	<p>芝愛宕下の刀剣研師“山庄”こと山屋庄之助は二年前、旗本屋敷の中間寅造を刺殺して姿をくらましていた。山庄は世話する人があって婿入りしたが、先代が死んでから酒に溺れて博奕にも耽るようになり、まるで悪霊にでもとりつかれたかのように人が変わって酒盃を離さないのは“亀の祟り”だと言われていた。その昔、海亀を啖ったからのようであった。関八州取締りも本腰を入れたが山庄の動静は杳として知れず、追い詰められて野垂れ死にでもしたのではないかと思われていた矢先、本所御竹蔵で若い魚屋が殺られた。同じ手口に“すわ、山庄が江戸に戻ったか”と、その筋の者は色めき立った。そして、“五二半の旦那”に密命が……。はたして……。 (第一話・人殺しの唄) 隠密廻り同心・甲斐半次郎の人</p>		春陽文庫